

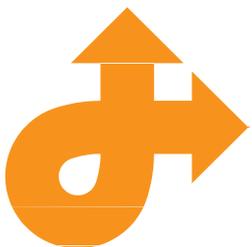
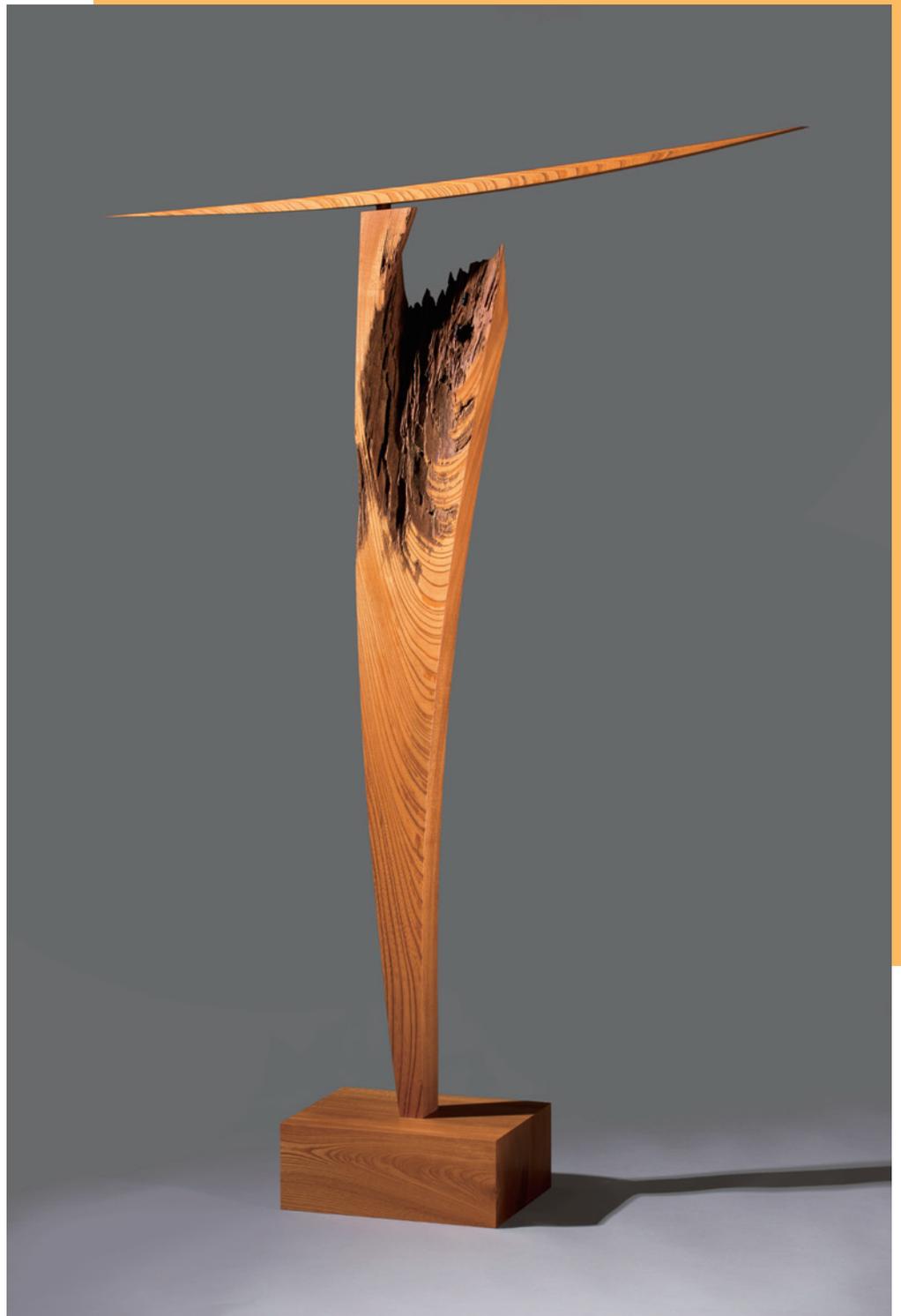
84th-85th

新制作
SHINSEISAKU

2022
会報

新制作協会

vol. 79



85回展に向けて 委員長 金森宰司

SNSで語り合うのも今風ですが美術館で作品を鑑賞し作家とあるいは作家同士語り、SNSで論評上げるのもいいかもしれません。

私は第51回展に会員にいただきました。創立会員の方々とお話しする機会はそれほど多くはないのですが、作家同士の語らひは華やかで、豊かさの余裕が感じられました。昨今は、何かと難しい世の中になってしまった様に思います。しかし新制作展を、コロナを理由に自宅にこもっていないで語らひが励みになるようなチャンスにしましょう。もちろんマスクをして一定の距離を保ってですが。



昨年の11月12月にはもうコロナが収束と期待値が高まったのにも関わらず、今年になり再び危険水域を超えました。コロナは我々の生活にあらゆる変化をもたらしました。困難な日々が長期に渡って続いています。こういう苦境にこそ、芸術は大きな役割を果たさなければならないのではないのでしょうか。人と人が接することがむずかしい中で、芸術は距離があっても心を伝える役割を持っています。コロナで自宅にすることが多くなり世間の中に身を置くことが減り、孤独で、自己の中にとどまってしまうがちです。芸術は世間に身を置き、あるいは世間と向かい合って今の自己を表現します。芸術は一人の世界にいないと内容を深めることが難しいですが、世間に目を向けていてこそ深められるのかと思います。

あらゆる変化を当たり前前に咀嚼しているのが人間だと思います。我々作家はその変化に反応してそれを造形で表現しているのではないのでしょうか。家族のこと、生活のこと、社会のこと、無視することができません。アトリエにこもる時間が増えたことで、お一人お一人の秘めたる世界をじっくりと煮詰める機会にもなっている気がします。

今、アトリエの中で、じっと温め熟成されたイメージを、新制作展で発表していただきたいと思っています。

85回新制作展はアトリエからの心を発信します。

第85回新制作展 “The 85th SHINSEISAKU Art Exhibition”



85回新制作展は下記の日程を予定しております。

国立新美術館
(The National Art Center, Tokyo)

2022年
9月21日(水) - 10月3日(月)
休館日: 9月27日(火)



- 2022年度委員
(代表委員会)
委員長 金森宰司 (絵画部)
副委員長 永津守 (彫刻部) 尾埜行男 (SD部)
代表委員
●絵画部 小野仁良 高堀正俊 永田由利子 松木義三 矢澤健太郎
●彫刻部 江村忠彦 木方立樹 佐善圭 松枝源太郎
●SD部 五十嵐通代 岡本泰子 白川隆一 杉田文哉
(合同委員会)
●会計委員会 ●図録委員会 (図録/広告)
●美術館担当委員会 ●広報委員会 (広報・PR/会報/HP)
●受賞作家展委員会 ●慶弔委員会 ●美術団体懇話会

各部より

絵画部 松木義三

昨年コロナ禍であっても新制作展を国立新美術館で是非開催したいと考え、応募は1人1点に限らせていただきましたが、応募者全員の作品を展示しました。

例年とは異なる展示となりましたが、応募された作品は力作ぞろいで見応えが充分ありました。それぞれの個性的な作品から発する力が会場に満ちていました。1枚の作品に凝縮された作者の想いの強さでしょうか、描き込んだ絵の具の重なり力なののでしょうか、豊かな多様性のある展示会場となりました。

多様性は新制作の特徴でもあります。表現したい想いがあって、その想いにふさわしい表現方法を模索する。今までのやり方ではどうしても自分の想いを表現するのに充分ではなく、独自の表現方法を生み出す。これが多様性の源でしょう。

秋の新制作展でいろいろな作品に出会える事は大きな喜びと期待です。応募をお待ちしております。

今年は例年のように審査を行い入選作品を展示します。

企画展示は「小関利雄・古茂田守介」、レクチャーは「山梨俊夫：前国立国際美術館館長、もう一人未定」、会員によるトーク「創造と模倣」を行います。



彫刻部 松枝源太郎

一年一年が特別な、唯一の開催であるということ。当然のことなのですが、これは昨年84回展が無事に初日を迎えられた時、私が最初に感じたことです。繰り返される緊急事態宣言の発令、その度に危ぶまれた美術館での開催。搬入日に作品が搬入されてくるまで安心できた日はありませんでした。結局84回展は、緊急事態宣言下での開催となりました。幸いにも多くの「人」の思いは結実し、一定の成果を取ることができました。

コロナ禍、彫刻部ではこれまで当たり前に行ってきたひとつひとつの事柄を再度検討し最善の道を模索しました。そして、新たな試みも具体化に向けて進んでいます。

85回展では昨年に引き続き、デジタル画像データ審査を行います。彫刻の「もの」そのものを扱う特性からも賛否の分かれる審査方法ではありますが、すべての人の安全を第一に考えた決定です。

様々な制約が生まれた今、多くの人はこれまで以上に、実物を見る、感じる、体験するということまで立ち戻り、また考える機会を持ったのではないのでしょうか。

リアルな作品体験の場が今年もここに用意されます。会員・応募者・観覧者・関係者、すべての「人」で成り立つこの新制作を一緒に作りましょう。



スペースデザイン部 岡本泰子

画面やマスク越しでしか人の表情が見えないような非日常が日常となる現在、実素材に触れ制作し続けるという行為が、作り手一人ひとりにとって心の拠り所になるのではないのでしょうか。

直前まで続く状況の変化を抗う事なく無事84回展が開催できましたのも、そのような会員及び出品者の方々の思いとご協力の成果と存じます。

オンライン会議やオンライン併用により行われた審査では、地方会員の参加機会も増えました。感染症対策として展示形態ごとに時間差で来場人数を調整した陳列方法は、思いのほか人の動きがスムーズになり作業効率が上がるケースも見受けられました。このように85回展に向けた前例として意味のある結果も得ることができました。

ここ数年続くCOVID-19の脅威に加えて国内外の自然災害や世界情勢の変化に翻弄される日々を送るにつれ、ほんの数年前は当たり前だった日常生活にありがたみを感じずにはいられません。

今年も六本木の会場でそれぞれの思いや答えを具現化した作品が集い、五感に訴えかけるリアルな空間が構成されることを楽しみにしております。



第84回新制作展

審査陳列報告

絵画部

審査陳列委員長 鍋島正一

長引くコロナ禍の中、84回展を開催できたことは、会員出品者一同の熱意と努力の賜物と思います。例年と違い、一般出品は、エントリーによる全作品陳列という事で、出品者の増減が心配されましたが、実際には多くのエントリー者数で、盛況な展覧会になりました。絵画部の出品総数 一般435 会員91 遺作6点 合計532点。カテゴリー別出品者数では I 101 II 207 III 113 U30若者部門14でした。会期初日の受賞会議によって、新会員 8名、受賞者数 新作家賞10名 絵画部賞12名 SOMPO美術館賞1名が決まりました。新制作は審査が厳しいと言われていますが、今回は厳正な審査を心がけました。いずれも充実したクオリティの高い作品で、例年より多くの新会員と受賞者を選出することができ、今後に期待がもてる嬉しい結果となりました。陳列に関しては、当初心配されたより、広くゆったりとした空間になりました。会員、一般共々作品1点1点がより美しく見えるように心がけ、かなり実現出来たと思われました。また、企画展示として「時代を担ってきた作家たち2021」 瀬島好正氏「形」1985年・「作品A」1999年若松光一郎氏「Composition」1982年・「残されたメッセージ」1986年などの展示。ビデオによるオンデマンド・アートレクチャー 仙仁司氏(元多摩美術大学美術館学芸員) 佐々木吉晴氏(宇都宮美術館館長)なども行われました。

彫刻部

代表委員チーフ 渡辺尋志

第84回展は前年の開催延期状態を停滞させないため、新型コロナウイルス感染症の終息しない中でありながらも、なんとか開催は出来ないかと幾度も会議を重ね、出品者、会員、関係者の安全を考慮し、人流を抑え密にならない画像データ審査での公募が最も安全ではないか？という結論に至りました。そして、ウェブ上に作った作品写真展示スペースからの審査とウェブ環境のない会員には印刷した作品写真を送付しての審査となりました。他人の意見に左右されない、今まで以上に公平な審査が出来たという意見が多かったのですが、写真データでは作品サイズの見当がつかない等欠点も露呈し、今後の課題となりました。出品作品数、出品者数共に前回同等でありました。

陳列担当チーフ 柴田正徳

2年ぶりとなった彫刻部展示は、コロナ禍によって幾つかの変化がありました。地方、東京近郊を問わず会員の不出品が例年より20数名多かったこと、写真・チャリティー売り場を中止したことなどにより、いつもの会場風景より広く感じられたことです。本展は多くの会員・入選者の多様な作品群の展示が本来あるべき姿であり、再びそれが実現できることを願います。遺作展示は、故平山隆也氏、故石松豊秋氏、故照井榮氏、各氏の作品でした。

スペースデザイン部

審査委員長 佐伯和子

やっと新制作展の審査が始まる！1年の空白がどのように影響するのか期待と不安が交錯する中でこの日を迎えたが、今まで以上の多くの参加をいただきました。遠方会員の審査参加手段として次の方法を取りました。作品を審査前日撮影しデータ送信。それを基に各自審査返信、美術館での通常審査と合計し結果を相談後、最終決定。不明な箇所はスマホで動画撮影。ITを活用した方法は今後も有用な点が多くありました。傾向として作品の小型化は否めませんが、困難なこの時期、作り続けてこられたことに敬意を払いたいです。

陳列委員長 藤原郁三

コロナ禍で開催を心配しましたが、いつもより多い出品数となり安心しました。(応募点数107点、応募者数101人で、その内入選が52点、入選者が48名)特にミニアチュールの応募点数が増加しました。ミニは作品のためのエスキースと考へて制作する場合がありますので、今後ぜひ一般作品部門にも意欲的にトライしていただきたいものです。

作品陳列にあたっては、スペースデザインらしく、空間配置に一番気を使います。例えば、全ての作品が見渡せるよう配置に気をつけたり、又色彩の取り合わせを考えて配列しています。その甲斐あってか、バラエティーがあるにもかかわらず、スッキリした展示空間にまとめることができたと思います。



新会員紹介



小山 恵

静寂と喧騒、清と濁、瞬間と悠久、生と死、両極の二面を内包する絵画世界を追求しています。新制作展で自身の作品を一步退いて観て、次作の課題を得ながら、今に至っています。今後、さらに作品の質をより深め、昇華させるよう精進していきたいと思っています。

東京都生まれ
1986年 和光大学人文学部芸術学科卒業
1986年 第50回新制作展 初入選
1988年 和光大学人文学部芸術学科研究生修了
第82回 新制作展新作家賞受賞



近藤弘子

会員にご推挙頂き、心よりお礼申し上げます。震災の中メリケン波止場のランチ船を描いた作品が初めて関西新制作展に入選した時は、大きな喜びと生きる力を頂きました。この度の光栄は当時の熱い思いに重なり、残された生を考えるスタートラインとなりました。さらなる研鑽を重ね、内なる思いを描き続けたいと思います。よろしくご指導お願い致します。

1945年 兵庫県生まれ
1997年 第61回新制作展初入選
第75回、81回 新制作展新作家賞受賞



塩田志津子

銀色、銀地に魅せられて、絵を描き始めました。草花、自然、身に染み付いた故郷の文化、風土、歴史に思いを馳せ、今また、父、兄の愛した能楽の世界に入り込もうとしています。試行錯誤の毎日ですが、新制作という特別の場で、皆様に観て頂くことが出来、とても嬉しく思っております。

石川県金沢市生まれ
2006年 武蔵野美術大学造形学部通信教育課程卒業
2008年 第72回新制作展初入選
第79回、第82回 新制作展新作家賞受賞



下倉剛史

「新制作に出品する前は何もわかっていなかった」と言えるほど、参加してから学んだことは多く大きく濃密であったと感じています。これからはこの最高の研鑽探求の場を保持する一人としての自覚をもって自分・世間・作品とより真摯に向き合っていきたいと思っています。

大阪府生まれ
1999年 宝塚造形芸術大学洋画専攻卒業
1999年 第63回新制作展初入選
第78回、第83回 新制作展新作家賞受賞



杉谷俊一

上野で新制作展を初めて鑑賞し、その作品群にただただ圧倒されてから30数年経ちました。その間、遠隔地島根に居ても“新制作”という名前は常に身近に在り、皆様方の暖かな眼差しは心の支えでもありました。改めてスタートラインに立ったつもりで描き続けたいと思っています。

1950年 島根県生まれ
1973年 高知大学特設美術工芸科卒業
1984年 第48回新制作展 初入選
第75回、第79回新制作展 絵画部賞受賞
第80回 新制作展新作家賞受賞



竹本義子

会員の先生方の温かいご指導でここまで育てていただきました。《キッチン》と題しましてお母さんと子供達がビザを伸ばしたり、スパゲッティを茹でたり、その後は魚たち、タコ、カニも登場するにぎやかな場面となり現在にいたっています。これからも研鑽を重ね楽しい作品を創作し続けられるよう、一步一歩前進していこうと思っています。

広島県生まれ
1963年 共立女子大学家政学部卒業
2009年 武蔵野美術大学造形学部絵画科卒業
2001年 第65回新制作展 初入選
第71回、第72回、第80回 新制作展新作家賞受賞
第77回、第78回 新制作展 絵画部賞

スペースデザイン部



藤田憲一

初めて新制作展に出品して以来、会員の先生方から受けた手厚いご指導は、とても貴重であり感謝しております。まだまだ未熟ではありますが、新制作のマークに込められた「向上と前進」を忘れずに、より一層精進してまいりたいと思いますので、今後ともご指導よろしくお願い致します。

1966年 東京都生まれ
2006年 第70回 新制作展初入選
第75回、第79回、第80回、第81回 新制作展 絵画部賞受賞
第82回、第83回 新制作展新作家賞受賞



丸尾宏一

両親、家族、友人、そして厳しくやさしく励ましてくださった先生方。みなさんのおかげでここまで来ることができました。実家の漆喰の壁にキラキラとうつる木陰。それを見たとき、幼心に「きれいだなあ」と感じました。それが私の絵画の原点です。これからも感謝の気持ちと初心を忘れず、美しい絵を描き続けたいと思います。

1972年 兵庫県生まれ
1995年 京都造形芸術大学卒業
2008年 川の絵画大賞展大賞
第79回 新制作展絵画部賞受賞
第82回 新制作展損保ジャパン日本興亜美術財団賞受賞
第80回、第83回 新制作展新作家賞受賞



大木敦子

繊維という素材が持つ表現の可能性に出会ってから、挑戦と模索の中で制作し続けています。新制作にチャレンジし、皆さまから厳しくも温かいご意見をいただくことが制作の糧となりました。感謝申し上げます。ここをスタートとし、今後も精進していきたいと思っています。

1979年 栃木県生まれ
2002年 東京家政大学家政学部造形表現学科卒業
2010年 第74回新制作展 初入選
2010年 テキスタイルアート・ミニチュール展(以降5回)
2017年 個展 ギャラリー・イン・ザ・ブルー
第83回 新制作展新作家賞受賞

第84回新制作受賞作家展

新制作展では、優秀作品に協会賞、新作家賞を授与し、受賞者には、当協会各部主催の受賞作家展を企画しています。第84回展の新制作受賞者（協会賞・新作家賞）の展覧会が開催されました。

絵画部

シロタ画廊

2022年2月7日（月） - 12日（土）

雄鹿靖二、奥田善章、小松隼人、武田雪枝、田中直子、塚崎聖子、戸嶋利江、MARTIN FAUSEL、渡邊啓子、渡辺誠



1



3



2



4



5



6



7



8



9



10

1. 渡邊啓子 《泡・包・抱》 F100号
2. 奥田善章 《pigeon》 F100号
3. 田中直子 《森の入り口》 F100号
4. 塚崎聖子 《満月（雲間を行く）》 F100号
5. 武田雪枝 《遊》 F100号
6. MARTIN FAUSEL 《シブラーツクフェルのハイキング》 55cm × 115cm
7. 戸嶋利江 《電車で憩う》 S60号
8. 渡辺誠 《ある秋の日-III》 S100号
9. 雄鹿靖二 《記憶-1》 S100号
10. 小松隼人 《ユー・ガット・メール》 M50号

絵画部 金森宰司

彫刻部

ギャラリーせいほう

2022年1月31日（月） - 2月10日（木）

飯田昌史、井上直、浮田麻木、黄禹、広瀬護、槇あさ美

11. 飯田昌史 《殻 XVI (16)》 石膏
12. 槇あさ美 《野うさぎ》 新聞紙、葉半紙、はりこ紙等
13. 広瀬護 《air》 ダンボール、木屑
14. 井上直 《記憶の貯水池》 花崗岩
15. 浮田麻木 《牛バイク》 鉄
16. 黄禹 (HUANG YU) 《須臾相》 黒御影ジンバブエ、鉄板



11



12



13



14



15



16

スペースデザイン部

建築会館

2022年3月7日（月） - 12日（土）

雨森浩子、石垣健、西野美佐子、深尾雅子、録澤壽雄

17. 雨森浩子 《Crossing Over》 W156 × D5 × H240 ジュート麻、ステンレスワイヤー
18. 西野美佐子 《樹林帯》 W120 × D5 × H280 麻糸、綿糸、その他（二重織）
19. 石垣健 《COEXISTENCE II》 W60 × D60 × H180 鉄、ステンレス、ABS
20. 深尾雅子 《白水蓮曼荼羅》 W270 × D7 × H270 紙、綿糸、ポリプロピレンテープ、他
21. 録澤壽雄 《春 2022》 W400 × D2.5 × H193 板、朴、カヤ、麻糸



17



18



19



20

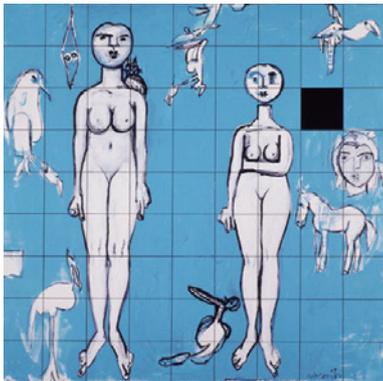


21

会員個展開催案内

生誕120周年記念 猪熊弦一郎回顧展 美しいとは何か Genichiro Inokuma "Beautiful"

会期：2022年4月2日（土）－7月3日（日）
休館日：月曜日（5月2日は開館）
開館時間：10:00－18:00（入館は17:30まで）
主催：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、
公益財団法人ミモカ美術振興財団



猪熊弦一郎《二人の裸婦と一つの顔》1989年
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館所蔵
©公益財団法人ミモカ美術振興財団

葦崎大村美術館企画展 「荻太郎展人間へのまなざし」

会期：2022年6月4日（土）－8月28日（日）
休館日：水曜日
（祝日の場合は開館、翌日休館、年末年始）
開催時間：午前10時－午後6時
（入館は閉館の30分前まで）
主催：葦崎大村美術館、葦崎市、
葦崎市教育委員会 共催：新制作協会
問い合わせ 葦崎大村美術館
〒407-0043 山梨県葦崎市神山町鍋山 1830-1
電話/FAX0551-23-7775（担当：九鬼）
Mail n-omura@eps1.comlink.ne.jp



生誕110年 傑作誕生・佐藤忠良

2022年7月16日（土）－9月19日（月・祝）
群馬県立館林美術館

巡回展開催案内

「第85回新制作展 京都展」

会期：2022年10月25日（火）－30日（日）
会場：京都市京セラ美術館

「第85回新制作展 名古屋展」

会期：2022年11月15日（火）－20日（日）
会場：愛知県美術館

訃報（2022年3月現在）

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、
心よりご冥福お祈り申し上げます。

小林昭子 氏 絵画部会員
2021年2月15日 逝去（享年93歳）
石松豊秋 氏 彫刻部会員
2021年7月8日 逝去（享年79歳）

編集後記

会報誌は、3年前から年1回の発行になり“報告とお知らせ”を重点にしたシンプルな形の会報になりました。1年間にわたる多くの情報を限られたページの中で掲載するのは、なかなか難しい事ですが、“見やすい、読みやすい”誌面作りを目指しています。

今号に原稿をお寄せくださった方、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。（小島）

表紙作品

澄川喜一

《そりのあるかたち 「生きる力」》

2020年
142.5×96.0×23.5cm
素材：神代櫻・櫻

写真撮影：岡本成生

自然豊かな島根県吉賀町で育ち、高校進学で岩国に移り住んだ少年時代、木造橋の錦帯橋を目にし、木の持つ「そり」湾曲と「むくり」膨らみの美しさに心奪われた。

彫刻家として、60年以上が経つが「そりとむくり」の美しさを今でも追い求めている私の原点は錦帯橋である。

長年、木を素材にして作りだした作品は木との対話から始まる。木材の素性を見て、聴いて「そりのあるかたち」を見つけ出す。どのような環境で永年育ってきた木なのか想像し、木の声を聴きながら良い姿を作りだす。木がきちんと応えてくれる。何百年もたった自然の木たちからエネルギーを貰いながら、制作を続けている。

1936年に創立された新制作協会は今年で、86年を迎える。1958年第22回新制作展に初出品「トルソー1」「トルソー2」、以降定期的に出品。32歳の時に新制作協会の会員となった時から長い年月が過ぎ、新制作協会の発展とともに作品を制作し続ける事が出来たことに喜びと感謝をしている。

2022年3月 澄川喜一

新制作協会事務局
〒160-0022
東京都新宿区新宿6丁目28番10号
大阪屋ビル202号
TEL：03-6233-7008 FAX：03-6233-7009
Mail: webmaster@shinseisaku.net
www.shinseisaku.net

発行 新制作協会
発行日 2022年5月
監修 金森宰司
企画・編集・制作 広報委員会広報誌編集委員
小島隆三、山口都、森智之、雨山智子
デザイン SHIMA ART&DESIGN STUDIO

